

第1回 伝道者の形成

2024 年同盟基督教団伝道懇談会

水草修治

「イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。『わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としましょう。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。』」マタイ 28:18-20

はじめに

私が長野県南佐久郡で開拓伝道・教会形成に携わったのは、1994 年春から 2016 年春まで 22 年間です。南佐久郡（当時人口約 25000 人）の面積は 767 平方キロメートルです。ちなみに東京都 23 区の面積は 622 平方キロメートルです。

開拓伝道のノウハウ本はいくつか読みましたが、私の場合は、あまり役に立ちませんでした。なぜかと考えてみたら、それぞれの置かれた条件が違うからです。まず、伝道者が遣わされた地域が人口増減・文化・歴史・経済状況・住んでいる人々の年齢層・時代状況などことごとく異なっているわけです。そして何より伝道者自身の年齢・経験・性格・賜物、つまりキャラクターがすべて違います。

ですが 1 回だけ開拓伝道の話聞いて、心に残り、力になったのは福音自由教会の拝高牧師の話でした。それは、まず開拓伝道者自身の伝道者としての信仰と人格の形成についてうかがったことと、その伝道者が理解する伝道と教会形成の原則でした。それに倣って第一回目は伝道者としての形成、第二回目は開拓伝道の原則と実践例、第三回は教会形成の原則と実践例についてお話しします。

1 救い

家に仏壇がある葬式仏教の家庭に育ったものの、日本キリスト教団須磨教会付属の千鳥幼稚園に通っていました。帰るべきところはキリストということが植え付けられたのかもしれませんが。

しかし小学・中学・高校と啓蒙主義的な日本の教育を受けて、無神論的になって行き、特に高校世界史で魔女狩りについて知って、キリスト教に反感を持つようになりました。

高校 2 年生のとき、同級生の一人が授業中に教師に問われて自らが信じていることを話すのを聞いてある感銘を受けました。

高校 3 年の夏休み、統一協会の集会で塩狩峠の映画を見ました。十字架上の主の祈り「父よ彼らをゆるしたまえ」に衝撃を受けましたが、自分は正しい人間であると思い込んでいました。

9月、祖母の自殺に直面し、自分は単なる醜いエゴイストである事実には愕然としました。

翌年晩夏9月初頭に、改革長老教会東須磨教会の増永俊雄牧師と面談、

- ①「それは聖書に書かれていないから、わかりません」→聖書信仰
- ②魔女狩の問いに「罪人である私たちはただ神の前に悔い改める他ないのです」
- ③「神の栄光をあらわすことがキリスト教信仰の目的です。」
- ④翌1978年1月に主の迫りがあって教会に通い始め、2月に信仰を告白した。
- ⑤岡田稔『カルヴィニズム概論』を読みました。世界観としてのキリスト教理解の始まり。

2 伝道者としての召し

同年3月に茨城県つくば（当時は桜村）に転じ、4月に日本基督教団つくば学園教会で自由主義キリスト教のひどい実態に触れました。その後、白石君に紹介されて5月から土浦めぐみ教会に通う事になりました。

その1年間、故郷の増永牧師に聖書についての質問の手紙をやりとりしました。増永先生はカルヴィニストで、神の主権を中心とした神学の手ほどきをしてくださいました。カルヴィニズムは「生活の全領域において神の栄光を現わす」ことを目指すキリスト信仰です。

私が、神の前に「献身します」と祈ったのは、大学1年の冬、1979年1月に洗礼を受けて、1か月ほど後の2月の下旬のことです。内心で大事な友をさばく自分の底知れぬ罪深さとそれを赦すために主イエスの十字架があったことを改めてまざまざと示されて、「この人生を自分のために使ったのでは申し訳ありません。主のために用いてください」と祈ったのです。それから1か月祈ってから、朝岡茂牧師（同盟基督土浦めぐみ教会）にそのことを話しました。すると、牧師は「召しのみことばが与えられるまで祈りなさい」とおっしゃいました。

それから約1年と2カ月間、教会生活とディボーションで主のお取り扱いを受けて、翌1980年5月に全部明け渡したとき、主は召しのことばをくださいました。マタイ福音書28章18-20節

「イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」

これが私の使命の原点であり、折々立ち返るところです。

3 大学時代

(1) 大学で

①キルケゴール・・・・・・・・・・実存的信仰

観念的でなく、いのちがけでキリストを信じる。

(実物は朝岡茂牧師の主の前の捨て身の生き方でした)

②パスカル、ドイウェルト・・・・多様性と統一性・領域主権論

生活世界は多様な領域があり領域ごとに固有の価値があり、
かつ、神にあって統一性がある

③デカルト、シェーファー・・・・合理主義の祖と、その結末である現代の悲惨。

(2) 土浦めぐみ教会で学んだことと、挫折

①「献身者は、牧師の右腕だ」というのが朝岡茂牧師のことばでした。私は教会学校中学科を担当させていただいて一生懸命に奉仕しました。大学生だった私は、主日は一番に教会に来て、鍵を開けて、ストーブをつけ、もう一度玄関を掃き清めました。中学生たちとは、毎週一人一人交換ノートを作ったりなどしました。

②主日は夕礼拝として神学読書会、シーセンの組織神学に参加しました。彼の ST から教理の根拠は、どこまでも聖書に根拠を求める態度を学びました。

③中学科の説教のために、後藤光三先生とヘルムート・ティーリケの説教の本を勉強し、教会学校のメッセージを磨き上げました。しかし、その熱心は、時折、あまり熱心でないCSの同僚をさばくことにもなりました。大学卒業間近、神学校入学の一か月前、牧師宅を訪ねてお話をしたとき、朝岡茂牧師は、「君は傲慢だ。君の周りには草も生えない！」と怒りを発せられました。私は愕然として「自分のような者が伝道者となったならば、神様にご迷惑をおかけするだけではありませんか」と思いました。

また、朝岡茂先生は言われました。「神学生になったなら、士官学校に入ったと思って、いのちがけで勉強し、いのちがけで奉仕しなさい」と。また、「君のような奴は、他の牧師には任せられないから、宮村武夫牧師（新約教団青梅キリスト教会牧師、新約学者）に奉仕教会をお願いしておいた」と言われました。

3 東京基督神学校時代

(1) 「存在の喜び」＝「子とされた恵み」を知る

1982年3月末、東京基督神学校入学許可が出ると、宮村先生が仕える青梅キリスト教会を訪ね

ました。「どんな奉仕でもします。お便所の掃除から始めます。」と勢い込んで申し上げました。すると、宮村先生は、「水草君。礼拝者として、そこに存在すること。それが最も大切な奉仕です。」と言われました。しかし、そのときの私にはその意味がよくわかりませんでした。

神戸の父が食道がんで手術をしても余命半年という宣告を受け、4月10日が手術となりました。奉仕神学生として初めの主の日に帰省しました。看護する母を休ませるため奉仕教会を欠席するたび、心の中で『それでも献身者なのか。』という思いが私を責めていました。

しかし、青梅の教会と開拓中の小作の伝道所で教会学校の子供たちとさんびかを歌い、礼拝をささげ、解き明かされるみことばを聴き、折々の交わりで話された宮村先生のことば「なによりそこに存在すること、それが最も大切な奉仕です」が胸に染み込んできました。

十月十日、父が天に召されました。葬儀が終わって一ヶ月たったころ、宮村先生は教会付属の幼稚園の記録文集『存在の喜び——もみの木の十年——』が出版され、プレゼントされました。宮村先生は新約学者らしく、「存在の喜びの『の』は、目的格的属格の『の』です。つまり、存在が喜ぶ喜びではなくて、存在を喜ぶ喜びです。神様があなたの存在を喜んでくださっている、その喜びです。」と説明をなさいました。「園児にとって、何が無くとも、これだけは是非必要なこと、それは自らの存在が喜ばれている確認です。両親が自分の存在を喜んでいてくれる。園でも、教師や友人たちが自分の存在を喜び受け入れてくれている。自分の存在が少くとも或る人々に心から喜ばれているとの自覚は、必要不可欠なものだ。これこそ、この十年深まりつづけてきた確信です。何が出来るか、何の役に立つかと機能の面からのみ判断されるのではなく、ただそこに存在していること自体が喜ばれ重んぜられる。この経験なくして幼児は、いや人間は真に人間として生きることは出来ないのではないのでしょうか。」（第一版四十八、四十九頁）

私は変えられました。キリスト者として生きることの喜びと自由があふれました。それは今日まで変わりません。神学校最終学年になって母教会の朝岡茂先生のもとに帰ったとき、先生はガンの床にありましたけれども、私の様子をご覧になって、「君は伸びた。」とおっしゃいました。朝岡先生は私のような者が真の意味で伸びるためには、朝岡先生のもとではなく、宮村先生にゆだねることが必要だと見抜いていらしたのでしょう。私は朝岡茂先生のもとで主の兵士としてのいのちがけの厳しさを学び、宮村武夫先生のもとで神の子とされた喜びを知ったのです。

②「子とされた恵み」

しかし、この「存在の喜び」は救済論的にはどう位置づけられるのかわからず、十年ほど考えました。そして得た結論は、私が経験した「存在の喜び」とは神がキリスト者に賜る「子とされた恵み」なの다는ことです。プロテスタントの典型的な救済の順序は、＜義認—聖化—栄化＞ですが、ここには最も大切なことが欠けています。それは「子とされたこと」です。義認において神は、被告に対する正義の審判者ですが、子とすることにおいて神は被告を愛して養子に迎えてくれた父親です。神は、お前はキリストを信じたから、キリストの義を根拠として刑罰を免じてやったから、まあ仕方なく奴隷としてお前を家に置いてやろうということではなく、長子キリストに結ばれた私の存在を子として喜んでくださることがわかったのです。

「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けた

のです。この御霊によって、私たちは『アバ、父』と叫びます。」ローマ8章15節

(2) 歴史意識

東京基督神学校で学んだことはトータルなことです。私にとって最も意味があったのは丸山忠孝先生による歴史神学であり、歴史家山口陽一君との出会いでした。

①私は大学で哲学にいたので事柄を観念的に捉える傾向がどうしてもあるのですが、時空の中に起こった具体的出来事に根差してものを考えることを教えられました。

②「教会と国家」という軸をもって教会史を見るということを学びました。

③教会史には、成功が呪いとなり、失敗が祝福となることがあります。目先の結果に一喜一憂せず、二千年の聖なる公同の教会の歴史のなかで今の日本の宣教を委ねられているのだという意識を持つようになりました。

(3) 日本福音土着化祈祷会「葦原」

ところで、神様の前に献身を表明したときから、神様が私をどのように用いようと、また用いまいとご自由であると考えていました。私がお世話になった朝岡茂牧師は、私が神学教師となるようにと考えておられたようです。というのは、当時、土浦めぐみ教会の夕礼拝として持たれていた、H・シーセン『組織神学』読書会に積極的に参加していたからです。朝岡先生が仰ることは、そうかもしれないなあと思いつつ、私自身はそのことは主にお任せして、1982年、東京基督神学校に入学し学びが始まりました。

1年生の秋に、友人の山口陽一君たち数名で、毎週月曜日の夕食後、「日本福音土着化祈祷会 葦原」を始めました。その趣意書は以下の通りです。若気のいたりという感じもして、少し恥ずかしいのですが、私が後に農村開拓伝道に進んだことと関係しているのです。紹介します。

日本福音土着化祈祷会「葦原」趣意書

1983年3月7日

天地創造の神は、みこころのままに私共のうちに働かれる神であると知ることは、志を持って何かを為さんとする者にとって、この上ない励ましであります。今私共実に小さな集まりではありますが、日本に於ける福音宣教、とりわけ「農村」と称される地域への宣教のために祈りと学びを行なっていきたいと志し、日本福音土着化祈祷会「葦原」を結成いたしました。

以下、この会の趣意を述べさせていただき、御賛同、御同労を仰ぎたく存じます。

趣意

この会が、特に「農村」宣教に主眼を置きながら、日本福音土着化祈祷会と称するのは、「農村」への取

り組みが日本という土壌に福音が根を下ろし結実することを望む上で、欠くことのできない視点であると考えからです。

「農村」とは、古来、葦原開墾以来の日本の集約農業の中で培われ、さらに幕藩体制下に再編強化された共同体規制が、現在なお精神的かつ因習的に脈々と息づいているような地域と規定します。（この共同体規制は広く日本人の精神構造の「根」となっているのではないのでしょうか）かかる意味において「農村」とは産業構造と精神構造のあいまった文化の問題であると言えます。

明治期以来、教会はこの「農村」への宣教の再三の試みにも拘わらず浸透しきれないまま、むしろ、そこから離れるということで生き延びてきたのではないのでしょうか。特に戦後の高度経済成長期を通して、人口が都市に集中してきたのに伴い、教会の「農村」離れも著しくなって来たと思われまます。

しかしながら、「農村」を離れ、信徒数を獲得しやすいところで形成された教会は、伝統的な日本の社会の中にあって、孤立とまでは言わないまでも不自然な隔たりを作り出しているのではないのでしょうか。

そればかりか、世の能率主義は教会内部をもむしばみ、会員数が教会の評価の最大基準とされるような風潮なきにしもあらずです。こうした状況下で「すべての造られたもの」を目指すべき教会の福音宣教への目は「農村」への幻を見失ってきているのではないかと案ずるものです。あるいは世界宣教の視野の必要が叫ばれ、海外への宣教師が多くの祈りに支えられて、益々その働きを広げようとしているなかで、一方「農村」への宣教は忘れられて行くばかりではないか・・・そんな懸念をも覚えずにはおられません。

私共の試みは、「都市」中心の宣教論のみ横行する現状に対する小さなアンチテーゼではありますが、これは聖なる公同教会の形成の一端をになう日本の教会の宣教のために決して無意味なことではないと信じます。

私共福音宣教の業に召された者として、日本に於けるより望ましい姿での福音の土着を考え、「農村」宣教への祈祷の同労者となりたく願うものです。

日本福音土着化祈祷会「葦原」一同

また、この会で時折朗読されたのは、江戸時代末、日本開国後まもなく来日した S.R.ブラウンが故国の教会あてにしたための書簡の一節でした。以来、時折、これを読み返しては「この国が神の国となりますように」という祈りに胸を熱くします。

「わたしは、しばしば、独りごとに、いや仲間にも言っているのですが、この日本国がキリスト教国となったら、どんなにすばらしいだろう・・・と。この国民に福音の喜ばしい感化を与えることができるよう、神は力をあらわして下さるでしょう。もしそうなれば、日本を地上の樂園にすることも不可能ではありません。この美しい谷や野原、山腹、農家、村落、町村、都市、全国どこにでもきかれる『南無阿弥陀仏』という祈祷が、『なんじ、高きにいます神よ』または、『天にましますわれらの父よ、み

名をあがめさせたまえ』という祈りに変わる時代は、現に来つつあるのです。その時、『日出づる国』はひれふして『爾名は異邦人の間に高くかけられん』となります。これは単なる叙事詩でなく、事実であることは、あなたもわたしも、本国の諸教会も信じていることです。主はそう言いたもうたようにもうそうなりつつあるのです。どうしてこのようなことが起こらないと言えましょうか。」1862年(文久二年)11月8日フィリップ・ペルツ宛て 『S. R. ブラウン書簡』

36年間、伝道者として歩んで思うのは、都市に召された人は都市で、農村に召された人は農村で、それぞれ召しに忠実に奉仕出来たらこれほど幸せなことはないということです。

4 大泉聖書教会での9年間

(1) 「イエス様の十字架痛い痛い」・・・福音の核心

神学校卒業後最初の任地、練馬区の大泉聖書教会で宣教師とともに4年間、牧師夫婦で5年間、9年間働きました。そこで重度の自閉症の小林龍司くんと出会いました。日ごろはまったくコミュニケーションが取れない龍司君が、ある日のCSにおいて、「**イエス様の十字架、痛い痛い。ごめんなさい**」という信仰を告白しました。そのことから福音の核心を再確認させられました。世界観としてのキリスト教とか包括的福音理解ということも大事でしょうが、核心は「イエス様の十字架、痛い痛い、ごめんなさい」つまり、「十字架のことば」です。

(2) 神の人は自信を失わなければならない

1985年、神学校を卒業し、練馬で老練な宣教師 M・ジェイコブセン先生とともに4年間開拓途上の教会で働き、5年目から5年間は私と家内だけで合計9年間奉仕しました。私が宣教師を主任として、その下で働き始めた時点で、すでに集会は20名弱で開拓から自立に向かう時期でした。

20名ほどの群れに毎月40万円の民家を改造した会堂の返済の重圧がのしかかっていた。その返済の多くの部分は、宣教師の英語教室からの収入でまかなっている状態でした。牧師家族は、三食のうち一食はパンの耳で暮らしました。この経済的に厳しい生活の経験があったからこそ、信州の山奥に開拓伝道に出ることもできたのだと思います。

この練馬時代に、もう一つの貴重な経験をしました。26歳で牧会者となった私は、神学校で学んだカルヴァンのように使命感に燃え上り、教会はこうすべきだ、ああすべきだと熱心に教えました。けれども、3年目の秋、問題が持ち上がりました。ジェイコブセン宣教師は国立市のTCCで教えていたのですが、TCCが千葉に移転して大学化することになり、大学とともに移動しなければならなくなったのです。ところが、先にお話したように会堂返済は宣教師に多くの部分を依存していましたから、信徒たちはパニックに陥りました。実は月額20万返済して、返済期間を延長してもらう準備をしているところでしたが、その準備している最中に、どこかで情報を聞いた信徒が集会を開いて宣教師が去ることについて話したので、教会は大騒ぎとなり、宣教師と牧師を非難する声が上がりました。役員は、牧師には宣教師について「無責任だ」という非難を、宣教師には「牧師に傷つけられた」という非難を話したので、宣教師と牧師の間で情報が錯そう

しました。結局、役員は宣教師に「牧師と教会と両方支えられないから、牧師に出て行ってもらほかない」と言ったようです。

宣教師は教会のことを心配しながらも、12月、1月、米国に宣教報告に帰らねばなりませんでした。私は12月下旬に目が回るような症状が出ました。1月早々下血して、病院に行きますと「十二指腸潰瘍でしょう」と見立てられたあと、廊下で倒れて緊急入院となりました。赤血球値が正常値の三分の一なので、失血死する惧れがあるということで、医者は出血点を見つけるために、上から下からカメラを入れてさぐりました。全国の同労者に祈っていただき神様のあわれみによって、手術もせず一晩でいやされましたが、念のために1週間入院となりました。

私は病床にあって考えました。不思議と、病に倒れると、自分の罪について考えるものです。「私がこの三年間、一生懸命にしてきたことはすべて間違いであり、罪でしかなかったのか？」私は一週間で退院して、礼拝では変わらずみことばを忠実に説きました。礼拝をささげるうちに教会は落ち着きを取り戻し共に礼拝できる喜びが戻りました。やがて宣教師も帰って来られました。そうしたら、一人の女性信徒が、多額の献金を持参されました。先に召された御夫君の遺産がようやく整理されたので、教会のために用いてくださいと500万円をささげられたのです。すると騒動は収まりました。天城の教団総会の時に持たれた、水草抜き信徒会に臨んだ宣教師は、水草統投は無理だろうと考えていましたが、信徒会は水草統投で一致したのです。

その年のアドベントに本棚に積読になっていたウォッチマン・ニーの本『アブラハム、イサク、ヤコブの神』を読みました。ヤコブはヤボクの渡しで神と相撲を取って、もものつがいを打たれ、足を引きずるようになりました。もものつがいとは人間のからだの関節のなかで最も強いところですよ。神の人は、神に自負するところを砕かれなければならない。ひとたび神に打たれると、その人は、何をしても自信がなく、常に「神様大丈夫でしょうか？」と尋ねながら一步一步進むほかなくなる。しかし、神に打たれた当座は、いったい自分の身に何が起こったのか理解することができず、後になって、「ああ、あれは神が私を打たれたのだ。」とわかるのだということでした。善悪を論じるのは、世の人々がしていることです。神の人は、「これは神のみこころなのかどうか」ということを常に問いながら生きるのです。神の人は自分の十字架を負って主イエスに従って行けばよいのです。私は、神の人は、もものつがいを砕かれて、いつも神様に「これはみこころでしょうか？」と問いながら生きる者とならなければ役にたたないということを、この取り扱いを通して教えていただきました。先の存在の喜びと並んで、この出来事は私のその後の伝道者としての歩みにおける、もう一つの大事な経験となりました。

まとめ

- ①カルヴィニストの増永牧師から・・・・・・・・・・聖書信仰、世界観的信仰
- ②大学時代の学びから多様性（区別性）と統一性（類似性）・・・・領域主権論
- ③朝岡茂牧師「捨て身」の生き方、キルケゴール・・・・・・・・実存的生き方
- ④丸山忠孝先生・山口陽一君から歴史ということ。・・・・歴史意識
- ⑤小林龍司君「イエス様、痛い痛い。ごめんなさい」・・・・キリストの代償的贖罪

- ⑥宮村先生のもとで・・・・・・・・・・・・・・・・・・存在の喜び。子とされた恵み
- ⑦「葦原」・・・・・・・・・・・・・・・・・・農村伝道
- ⑧自信を失い、一歩ずつ「これはみこころにかなっていますか？」と問いながら生きる。

第2回 福音を宣べ伝える

2024 年伝道懇談会

水草修治

「彼らが集まって来たとき、パウロはこう語った。「あなたがたは、私がアジアに足を踏み入れた最初の日から、いつもどのようにあなたがたと過ごしてきたか、よくご存じです。私は、ユダヤ人の陰謀によってこの身に降りかかる数々の試練の中で、謙遜の限りを尽くし、涙とともに主に仕えてきました。益になることは、公衆の前でも家々でも、余すところなくあなたがたに伝え、また教えてきました。ユダヤ人にもギリシア人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰を証ししてきたのです。」使徒 20:18-21

1 三つの問いとふさわしい助け手

(1) 三つの問い

共に四年間大泉聖書教会に仕えた宣教師夫妻が千葉に移られて、私が主任牧師となり、教会は日本同盟基督教団に加入しました。宣教師が去った後も、教会には少しずつ受洗者が与えられていました。しかし、しばらくすると私は「自分は主の召しに十分に答えているだろうか？」と自問するようになりました。神学校卒業後、春と秋に福音土着化研究会「葦原」を友人たちと開いていましたが、研究だけなら机上の空論です。

そのとき、神学生時代に宮村武夫先生から教わった＜人生の岐路における三つの問い＞を思い出しました。第一の問いは、「君が救われてキリストのからだに招き入れられた以上、必ず、君にも主のためにできることがある。だから、まず『私にもできることは何か？』と問うてみなさい。」第二に「キリストのからだは多様性に満ちている。だから、『私にしかできないことは何だろうか？』と問うてみなさい。」そして第三に「人間は歴史的存在、つまり、年をとっていく者であるから、『十年経ったらできなくなるだろうが、今ならできることは何か？』と問うてみなさい。」神の摂理の統一性と多様性と歴史性を踏まえた三つの問いです。

そこで私は、この三つの問いを自分に適用してみました。第一に、練馬での牧会伝道を続けることは確かに私にもできることでしたが、私よりももっとできる伝道者がいるだろうとも思われました。第二に、都会育ちの自分に何ができるかわからないけれども、志す人がほとんどいない農村伝道をしたいと思っているという点では、これは私にしかできないことであろうと思われました。第三に、開拓伝道に実際に携わった先輩に聞けば、開拓伝道には気力・体力・精神力が必要だとのことでした。私は、自分の人生の気力・体力・精神力の最も充実した時期を、農村伝道の働きにささげたいと願いました。また当時、私たち夫婦には未就学の男児が一人だけいましたが、十年経てば家族への責任は重くなって開拓に出るのは難しくなるでしょう。そこで私は「福音が聞けない場所、たとい聞くことができて通う教会がない地域に私を遣わしてください。」と祈り始めました。

祈り始めて三年目の一九九三年夏、長野県の松原湖バイブルキャンプで高校生アウトキャンプでメッセンジャーとして奉仕をすることになりました。私は「高校生たちを救いに導き、伝道献

身者を募ると同時に、私の今後の私の進路に主の導きがあるように。」と祈ってキャンプに参加しました。キャンプは祝福され、高校生たちがみな悔い改めてイエス様を信じたばかりか、キャンプリーダーたちも含め数名が献身を表明しました。

キャンプが終わったとき、キャンプ主事で「葦原」の仲間であった篠田真宏師が八ヶ岳の見晴らしの良い所に連れて行ってくれました。彼は「お互いビジョンを語り合おう」と言うのです。そこで私は、「どこか田舎の未伝道地に福音を伝えたいという重荷と、神学教育の重荷があり、祈っている。」と話しました。すると彼は、こともなげに「この南佐久郡には一つも教会がないから、ここでやればいい。松原湖バイブルキャンプでは地域の子どもたちが教会学校に来るようになっている。神学教育ということについては、フランシス・シェーファーのラブリのような働きができればとも考えている。」と答えました。祈りに対する主の答えだと思いましたが、不安はありませんでした。

しかし、翌早朝4時すぎに目が覚めたとき、「主はその御目をもって、あまねく全地を見渡し、その心がお自分と全く一つになっている人々に御力をあらわしてくださるのです。」(Ⅱ歴代誌16・9 新改訳第三版)というみことばが与えられました。自分に何の力もなくとも、これが主の御心であるならば、主が御力をあらわしてくださるに違いないと信じました。その夏のキャンプのテーマ賛美は「ここに私がおります」でした。

(2) ふさわしい助け手

私は松原湖から東京に戻り、妻に決断を告げました。すると妻は「はい。従っていきます。」と答えました。驚かれる読者もいるかと思いますが、妻がそう答えたのには二つの背景があったといいます。一つは、八年前に彼女に結婚のプロポーズをした時の返事です。私は彼女にこう問いました。「もし、ぼくが人生において大きな決断をした時、それが間違っているかもしれないと思っても、君はぼくに従ってくれますか？」彼女はその時、「はい。従っていきます。」と答えたのです。妻は、私から南佐久郡に開拓伝道に立つという決断を聞いたとき、「あの時、『はい』と答えたことについて、今、神様は私を試していच्छるのだ」と思ったのだそうです。もう一つは、神学校卒業後、毎年ずっと私が友人たちと研究会「葦原」を続けてきたことです。大泉聖書教会を会場にしたこともありました。妻はいずれ「その時」が来ると思っていたそうです。

とはいえ、その夏から私の病身の母が神戸から来て一緒に暮らしており、妻のおなかには二番目の子がいましたから不安がないわけではありません。そんな妻に主は詩篇23篇から「まことに、私のいのちの日のかぎり、いつくしみと恵みとが私を追ってくるでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。」と約束を与えて平安をくださいました。確かに因習の強い地域での開拓伝道は、志を同じくする「ふさわしい助け手」(創世記2・18)がいなければできないことではありませんでした。(夫婦の関係と教会形成については3回目で改めて触れます)

整理すべきことが三つありました。一つ目は大泉聖書教会の後任者を教団理事会にお願いすることでした。そこで夫婦で当時教団理事長であった吉持章先生のお宅に伺い、南佐久郡伝道の志をお話ししました。先生は「確信があるなら、立てばよい。」と励ましてくださいました。そのあと教団理事会に南佐久郡開拓の志と練馬の教会の後任者をお願いする手紙を出しました。二つ目は大泉聖書教会の兄弟姉妹に私の志を話すことでした。日本にはまだ福音を聞くチャンスがなく

通う教会もない地域があること、そこに行く伝道者が必要なことを話して理解してもらいました。そして三つ目は、母校東京基督神学校から「いずれ教鞭をとる準備をしておきなさい」と言われていたので、下川友也校長に、当面、組織神学担当教師の必要がないことを確認しました。私は信州の南佐久郡に伝道に入るに当たって、神学教師の道は断念しました。いよいよ具体的準備をしていくことになりました。

2 南佐久郡小海開拓伝道の準備

田舎伝道・開拓伝道について先輩に教えてもらいに行きました。

(1) 北條正人牧師

先生は佐渡、長野県伊那で伝道された牧師です。先生のアドバイスは、じっくりとあせらず腰を落ち着けて地域の人々になじみ、徹底してお世話するタイプの牧会について話してくださいました。「田舎は牧師でも広い家に住めていいよ」ともおっしゃいました。なんとなく田舎の雰囲気がわかってきました。

(2) 玉井邦美牧師

玉井先生は練馬区石神井という一戸建てベッドタウンで開拓伝道をして、当時、同盟教団としては大きな百名程度の群れを形成していらっしゃいましたから、どういう実践をされているのかを伺いたかったのです。二つのことを教えられました。

①第一は、「私は特別伝道集会はしないことにしています。特別伝道集会をすると伝道をしているという自己満足になるだけだから。伝道は毎月、毎週、毎日することですから。」

この言葉にはインパクトを受けました。大泉学園町での宣教師とともにやって来た伝道はまさにこれでした。伝道は、毎月、毎週、毎日するものだということです。

②もう一つは、「私は個人伝道が自分の賜物だと思っています。個人伝道をしていると楽しくて仕方がない。サマリアの女との対話の時に、主イエスが弟子たちに言われたように、個人伝道はわたしの食べ物です。個人伝道が、魂の収穫には必須です。」ということでした。

(3) 森川昌芳牧師

古河と豊橋での伝道についての証しの録音を聞きました。「教会が五十人になるまでは、信徒に『伝道しなさい』と言わないことに決めていました。わたしが伝道者ですから、まず自分が伝道するのだ、と。」

3 南佐久郡の土地柄と教会成長論的評価

南佐久郡は、人口 25000 人ほど。私が主から託された伝道責任地域と考えたのは、南佐久郡全域、北から八千穂村・小海町・南牧村・北相木村・南相木村・川上村です。東京 23 区の面積は 628 ㎢ですが、それより少し広い 767 ㎢です。ここ南佐久郡には他に教会がなかったのです。ちなみに小海線は日本一標高の高いところを通る JR です。

その中心である小海町は、千曲川沿いにあり、当時人口 7000 人弱で、標高 800 メートルくらいのところにあります。八ヶ岳の麓で、松原湖バイブルキャンプがある町です。

南佐久郡の主要産業は高原野菜農業。5 月から農業が本格化し、10 月までが長い夏で、農家は戦争のような日々を送ります。午前 3 時、4 時には畑に出て、朝ごはんの弁当を畑で食べて、夜寝るのは 10 時という生活が半年間続きます。11 月から 3 月までが氷点下 15－20 度程度まで下がり地面が 40cm くらいの深さまで凍結しますから、農業はできません。他の産業としては、大きな目の土建屋さんが二つ。そして、小さな商店街とスーパーがあります。

宗教的には、仏教と神社。諏訪大社の支社があつて、7 年ごとに御柱祭りがあります。これは長野県をあげての行事で、あちこちの諏訪神社で御柱祭があります。政教分離などまったくありえない世界です。教会にも神社の会費を集めに来るといふ町です。また、各家には大きな仏間と神棚があります。

小海町では、東馬流地区は井出さん、本間地区は篠原さん、土村地区は新津さん・・・というふう集落ごとに苗字がほとんど決まっています。その苗字ごとに祖先祭によって一族がまとまっているという具合です。神社にせよ、仏教にせよ、とくに熱心に信心しているわけではないのですが、地域・一族の結びつきというのは良くも悪くもとても強い地域です。

「実を結ぶ」とはどういう意味でしょうか。教会員数が増え、大きな会堂が建つことでしょうか？だとすれば、「実を結ぶ」教会成長論的観点からいえば、たとえば開拓伝道適地とは次のようになるでしょう。①伝統的因習がなく、②人口が増えていて、③不動産価格がほどほどで、④大都市に通勤する比較的経済的に豊かなサラリーマン家庭が定住する一戸建ての新しいベッドタウン、ただしベッドタウンでも転勤族の賃貸マンション群は避ける。⑤大きな福音的教会がすでにある地域は避ける。

南佐久郡は、中山間地で、人口は 25000 人ほどで減少傾向。宗教的・伝統的因習が強い。労働形態として、特に夏場は毎日曜日に朝礼拝に来るのがむずかしい人々が多い。そういう南佐久郡小海町に開拓伝道をするというのは、教会成長論的には愚かでしょう。けれども、聖書は伝道について効率主義を教えているのでしょうか。イザヤは、主のために実を結んだ偉大な預言者でした。しかし、彼は目に見えるかたちでは何も実を得ることが許されませんでした。(イザヤ書 6 章)にこうあります。

すると主は言われた。「行って、この民に告げよ。『聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな』と。この民の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を固く閉ざせ。彼らがその目で見ること、耳で聞くことも、心で悟ることも、立ち返って癒やされることもないように。」

主のしもべにとって最も重要なことは、召しに忠実であるという一点です。そこがあなたの召された地であるならば、それが効率主義的に有利であろうと不利であろうと、主の召しに忠実に伝道と教会形成に励めば十分です。

4 最初の拠点とした借家とその使い方

(1) 証し：借家についての主の導き

伝道の拠点となる家を町の開発公社でさがしました。開拓に立つ前年の1993年11月に、借家が一軒見つかったのですが、年が明けると電話がかかってきて、他の人に貸してしまったというのです。これには困りました。病身の母と乳飲み子を抱えてキャンプ場のバンガローに住むわけにもいきません。94年2月に開発公社を訪ねると、にべもなく、「ないものはない」ということでした。そこで、その晩松原湖キャンプ場で祈りました。「神様、あなたは私たち家族をこの地の伝道に召してくださいました。伝道の拠点となる住まいが必要です。」

翌朝、東京に帰る前にもう一度開発公社を訪ね、玄関を開けました。すると、昨日、「ないものはない」と言った篠原さんが立ち上がって、「ああ、きのうね、お宅が帰った後、人が来て、『3月に引っ越すことになった。』というんだ。それで一軒、空きましたよ。3月に引っ越してきていいです。3月の家賃はいりません。」とのことでした。その家は、最初に予約した物件と同じ間取りでしたが、最初の物件よりもはるかに条件の良い物でした。通学路そば、6台駐車可能、家賃77000円。5DK。神様が、「わたしががついている。心配いらない。」とおっしゃっていることを感じた忘れられない出来事です。

（2）用い方・・・公的な場は公的な場として

①看板 住宅としての契約上「…教会」という看板を掲げることは憚られたので「・・・教会牧師館」と掲げ、また開発公社には「牧師の家には十字架がかかげられるものです」と言って、十字架を掲げました。

②礼拝室は公の場として

12畳の日当たりのよいリビングについては、基本的に礼拝として用いる公の場として、基本的に私物は置かないことにしました。礼拝室の十字架はカラマツ材を削り、説教卓はカラーボックスを自分で加工して作りました。椅子は古い木製の折りたたみイスを世田谷の等々力教会からもらってきました。主の働きのために必要なものが無いときは、祈ることです。

教会形成を目指すならば、公私の区別が大事です。集い始めた人たちは、そこが牧師の個人宅であると意識していると、いつまでも家庭集会の域を出ないでしょう。普通の家を礼拝堂として用いるには、工夫と、牧師家族のある程度のがまんとメンバーの常識も必要です。

会堂を持つようになって、牧師館と教会堂が玄関を共有するつくりにしなないことは、大事なことです。もしそういう作りになっていないならば、せめて公の集会のときには、私物を見えなくしておくことです。牧師家族の生活臭が会堂に満ちている状態だと、教会形成はなかなか難しいのです。

③集会のもちかた

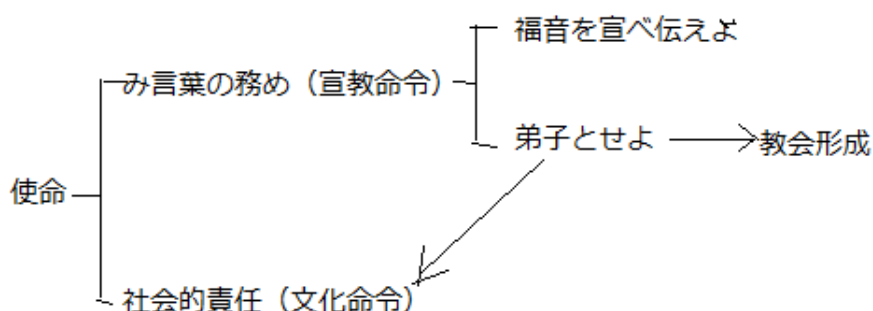
交わりのときと礼拝の時の区別も大事なことです。礼拝のときは将来目指している礼拝のかたちを念頭において、講壇と聖餐卓と椅子を配置することです。交わり、分かち合いの時は車座にすればよいと思います。週報も最初からつくりまします。群れが何を目指しているのかをからだで意識していくのです。生物は小さい時から、細胞一つの中にすべての遺伝子が入っているように、教会も小さい時から全体が潜在的にであつても、入っていることが大事だと思います。

5 心がけ・・・孤立しないこと

教会員としては、私の家族（妻、私の母、長男 7 歳、次女 0 歳と私）のほかに、キャンプスタッフ篠田夫妻、奥山夫妻。ほかに客員として中村夫妻、川村姉がいました。キャンプスタッフは、3 月下旬から 4 月上旬、5 月上旬、7-9 月半ば、12 月-1 月半ば、その他不定期に、礼拝には出られませんでした。それでも孤立感に陥ることがないために、ありがたい存在でした。地域への伝道をして、少しずつ人が加えられて来ましたが、MBC のスタッフは翌年以降、次々に転じて行かれました。

またバイブルキャンプが近くにあったので、折々、友人たちが訪ねてくださったことは、励みでした。田舎における開拓伝道で、困難な点の一つは孤立感ではないかと思います。伝道者はみなそうですが、特に開拓伝道にとって孤立は罠に陥ることになると思います。結城晋次先生がおっしゃった「牧師には、同業者ではなく同労者が必要です。」というのは本当です。

6 使命の整理



それぞれの働きを、領域主権的に捉える

<伝道と社会的責任>の関係は領域主権的に考えるべきです。つまり、いずれかを目的、他方を手段と考えないで、それぞれに固有の意義があります。<ケーリュッソーとディダスコー>も同じです。

弟子とされた人は、地の塩・世の光として社会に派遣されて責任を果たしていきます。社会的責任といえば、教会としては靖国問題などについての祈りと発言、災害時の救援奉仕などがありますが、日常的な地域・家庭・職場でキリスト者が家庭・職場・地域にあって生きることが、キリスト者の社会的責任です。牧師は広い視野をもって聖書を読み、説き明かすのです。マタイ 5:16 「このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようになるためです。」

7 みことばの務めとはなにか・・・ケーリュグマとディダケーの両方！

主イエスの大宣教命令は、二つの命令を含んでいます。第一は「あらゆる民族（すべての造られたもの）に福音を伝えよ」（マルコ 16：15、ルカ 24：47、使徒 1：8）、第二は「弟子とせよ（マタイ 28：19）」です。福音書の主イエスのわざも「宣べ伝え」「教え」とあります。

終戦直後、全国の教会には人が押し寄せ、宣教師たちは町々村々を訪ね、天幕集会を開きあまねく福音を伝えることに情熱を燃やし、次々に洗礼を授けました。日本中の教会は人があふれたそうです。しかし、宣教師たちは教会形成を知りませんでした。やがて国の経済が復興しテレビが登場すると、人々は潮が引くように教会に来なくなりました。昭和 22 年に来日した宣教師 M・ジェイコブセン先生は残念そうにおっしゃいました。「もしあの時、私たちが教会形成を学んでいたなら、日本の宣教地図は現状とはずいぶん違っていただでしょう。」

宣教師の後を受けた牧師たちは、弟子教育と教会形成がなされていない小さな群を引き受けて、食うや食わずで伝道をしました。そして、「教会論的に考えよう」を標語にしたそうです。ケーリグマとともに、ディダケーがなされなければ、実は残らないということです。この時代はバランスが取れていたように思えます。

ところが 1970 年代後半から教会成長論が流行しました。理念は「教会が人数的に成長する方法は真理であり、教会が人数的に成長しない方法は間違いである」です。結果、牧師たちは目先の数的成長に役立つことしかしようとしなくなったのではないかと。放送伝道、クルセード、EHC トラクト配布、因習強い田舎での開拓などから手を引くようになったのではないかと。説教壇でのディダケーにのみ集中して、それで務めを果たしていると思ひ込むようになったのではないかと。

8 ケーリグソー・・・①全ての家族に、②福音と足

（1）すべての家族に

伝道とは「人々にイエスの十字架と復活のことばを宣べ伝えて、回心させ、洗礼へと導くことである」と考えていないでしょうか。だとしたら、福音を伝えても、洗礼にまでいたらなければ、その伝道は失敗です。だとしたら、トラクトを何十万枚も配ったり、戸別訪問したり、あるいは後楽園球場で大規模な集会をしたり、ラジオで福音放送を流しても、洗礼まで至らねば、みな無駄だったということになるでしょう。そして、やる気がなくなってしまふ。「教会成長」イコール<人数増加>つまり<教会の人数増加に役にたたない働きは無駄>と考えたら、福音を伝えるのはいやになる。

しかし、聖書は「すべての民族に福音を伝えよ」と命じています。地域教会の牧師としては、とにかく託された地域のすべての人に、せめて「すべての家族に」福音を知らせる責任があります。ここが肝心なところですが、キリストの福音を知らせることが出来たならば、それで成功です。相手が受け入れるか受け入れないかは、相手が決めることであり、聖霊のわざです。伝道者としての失敗は、託された地域のすべての人々に福音を知らせることをしなかった場合です。

実は、私は練馬区大泉地区を去って南佐久郡に立つとき、「この街にはまだ福音を伝えるべきでありながら、伝えていない人がたくさんいます。神様、申し訳ありません。」という思いがありました。同じ過ちを南佐久郡では繰り返すまいと思っていました。なんとかして南佐久郡のすべての人に、せめて全戸に、くまなく福音を伝えたいと思いました。

現在、任地苫小牧（人口 17 万人）で全戸に福音文書を雨でないかぎり毎朝配っています。グーグルマップを用いれば、戸別地図が無料で手に入ります。

（２）福音と足

福音は人間のからだのどこと関係していると聖書は教えているでしょう。口でしょうか、舌でしょうか？いいえ。足です。

「良いことの知らせを告げ知らせる人の足はなんと立派でしょう。」ローマ 10：15

「足には平和の福音の備えを」（エペソ 6：15）

福音は礼拝堂の中で語られるものではなく、教会の外で、つまり、未信者を相手にケーリュッソーすることです。書斎で考えて、礼拝堂の中でただ信徒だけを相手に説教をしていて、ケーリュッソーをしたとは言えないのです。囲いの外に出て行って、福音を伝えます。

9 「福音」とはなにか？

（１）近年の福音理解の曖昧化

東日本大震災後、福音派諸教会もその救援活動に携わる中で「包括的福音理解」ということが言われるようになりました。すでに『ローザンヌ誓約』で教会には伝道と社会的責任という二つの務めがあると言われていたことで、新しいことではありませんが、福音派が実践に踏み出した点で画期的でした。しかし、社会的責任を果たすことすなわち福音宣教ではありません。そういう考え方は、19 世紀リベラルな教会の「社会福音」です。彼らは社会改良運動をすれば地上に神の国が来ると考えました。しかし、社会的責任は一般恩恵に属する務めであり、福音宣教は特別恩恵に属する務めであり、両者は同一ではありません。

また福音派で近年流行の N.T.ライトの書も福音理解を曖昧にさせています。ライトによれば「福音とは『イエスは王である』という宣言」です。「イエスは王だ」という福音理解は、「包括的福音理解」と同じく、キリスト者の視野を広げる点では意義がありますが、人間一人一人の罪、キリストによる贖罪という福音の核心部が曖昧になっています。

ライトについて詳細は、HP「水草牧師の神学ノート」→テーマ「NPP」

（２）聖書に戻って、福音とは

ルカ 24：47「その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、あらゆる国の人々に宣べ伝えられる。」

1 コリント 15：3，4・・・「福音とは、キリストは私たちの罪のために死なれ、葬られ、三日目によみがえられたこと」である。

使徒 20：21「ユダヤ人にもギリシャ人にも、神に対する悔い改めと私たちの主イエスに対する信仰を証してきたのです」

ヨハネ 3：16「神は、実に、その一人子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子

を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」

使徒 16 : 31 「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」

10 福音宣教の原理

(1) 可変的な一般恩恵の器に、不可変的な特別恩恵の福音を載せて渡す

40 年ほど前から contextualization (文脈化) ということが言われて、しばしば、「異文化に福音を伝えるために、福音を contextualize (文脈化) しなければならない」と言われます。しかし、これは間違いです。文脈化するのとは、福音の伝え方、伝える媒体としての伝道者の生活であって、福音ではありません。もし福音を文脈化すれば偽教師になってしまいます。「日本人は血なまぐさいのは嫌うから、キリストの十字架は抜きにして、神の愛だけ語ろう。」という風な具合です。もし、異なる福音によって人を集めたなら、そこに出来上がる群れは、主の羊の群れではなくて動物園でしょう。食い合って大混乱です。主の羊は、主の御声を知っているのですから、主の御声である純正な福音でもって呼びださねばなりません (ヨハネ 10 : 4, 5)。

①可変的:「ユダヤ人にはユダヤ人のように、ギリシア人にはギリシア人のように」(1 コリント 9 : 19-23 を参照)

→福音を伝えるパウロの生活を、「謙遜の限りを尽くして」相手に合わせたという意味。

共通恩恵の次元での歩み寄り。世間話、趣味、お土産など。

②不可変:「ユダヤ人にもギリシア人にも」(使徒 20 : 21)

「ユダヤ人にもギリシア人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰を証ししてきたのです。」

どんな文化圏に属する人にも、老若男女すべてに「神に対する悔い改めと主イエスに対する信仰」を伝えるべきです。福音の宣教の方法は文脈化してよいのですが、福音そのものは不可変です。共通恩恵の器に、特別恩恵を載せて差し出すということです。共通恩恵がポイントオブコンタクト。

(2) 色々な伝道方法…「風を警戒せず、雨雲を見ず」

上述の原理に立ってさまざまな方法でケーリュグマができます。それぞれのチャンス、賜物に応じて、積極的にケーリュグマすることです。「風を警戒している人は種を蒔かない。雨雲を見ている人は刈り入れをしない。」(伝道者 11 : 4) とあるようにならないように。下手な鉄砲も数撃ちゃ当たるです。

歩く。まずは、祈って地域を歩いてあいさつして回ることから始めました。伝道のためにコンタクトを作りたいならば、車ではもちろんだめで、自転車でもだめで、歩くことが肝心。歩いていけば立ち止まって話ができて、知り合いができます。

素敵で目につく会堂があれば、イベントをやれば人が集まるかもしれませんが、借家でスタートするならば、借家の会堂にはよほど困り果てた人か、勇気ある人でなければ入っては来ません。公民館などを借りて特別な音楽集会などすれば、人は来やすいでしょうが、その施設と日頃礼拝をしている民家がかけ離れていると、やはり民家の集会には訪ねにくいものです。

ですから、座って待っているのではなく、こちらが足を使って出かけていくべきです。福音は口でなく、足と関係しているのです。「足には平和の福音の備えをはきなさい」「良い知らせを告げ知らせる人の足はなんと立派なことでしょう。」です。

私は、任地に赴いて、「北に行きましようか、南に行きましようか。」と祈ってまずいくつかの集落をうろうろ歩きました。会う人たちにあいさつをします。最近引っ越してきたこと、どこに住んでいるかというようなことなど。田舎では、すぐに話にはなりますし、縁側に座って話になって、お茶になります。昼間に家にいるのは、たいていは足腰が弱ったおばあちゃんだけで、暇を持て余しているのです。

役場を訪ねて知り合いができると、田植えの手伝いに出かけたりしました。いっしょに汗を流して、食べると親しくなれるからです。そのとき、田んぼの祝福、食事の祝福を祈らせてもらいました。最初から、この人は神様の祝福をもたらす人なのだとすることが大事で、「ただの友だち」をスタートにすると、ずっとそのままになってしまったでしょう。これは大事なポイントです。

また、公民館活動グループとして「讃美歌愛好会」を始めて、公民館を無料で使わせてもらうことができました。公民館で直接伝道はできないかと思いましたが、讃美歌の歌詞の解説として福音を伝えました。開拓伝道者でお金がないならば、ないなりに方法を探してみることです。コンタクトができると家を訪ねてお茶を飲みながら話をします。卓球、囲碁、将棋などいろいろなグループがありますから、そういうものに参加して、コンタクトを作ることもできます。

やがて少しずつメンバーが与えられてくると、「あなたのお友達にとって教会に来ることは、ものすごく敷居が高いけれど、あなたの家の茶の間に来ることができるでしょう。だから、あなたの家庭に牧師が定期的に出かけるので、家庭集会を開かせてください」とお願いしました。一番遠くは小淵沢、川上村、南相木村にそれぞれ1か所、南牧村2か所、家庭集会を開くようになりました。長い年月をかけて聖書を開いて学んでいくという会です。聖書を味わい、世間話を色々する楽しい会でした。時間帯は、とにかく相手に合わせることです。夏場の農家のためには夜8時から10時くらい。ある人は午前6時から7時。ある集会は午前10時からというふうに。

子育ての会。聖書の子育てについて学ぶ会をして、若いお母さん、親子とコンタクトを作りました。これは家庭集会で、また会堂で行ないました。

福音指圧教室。救われた姉妹が指圧師で、「私もなにか伝道に役立つでしょうか」というので、始めました。夫婦とか親子で来てもらって、最初に福音紙芝居をして、お祈りをして夫婦親子で指圧をする仕方を指導するというものです。

クリスマスのリース作り・・・教会的な文化ということでやってみると、何人かの人たちが興味をもって来られた。数年たつと、町の行事としてするようになった。こういう集会はやって人が来ても、救われぬ。集会をやったら、来てくれた人の家を訪ねてお話をして知り合いになることが肝心です。

中学生学習室。毎週2回、中学生を相手に学習室を開きました。これもあくまでも教会の宣教活動として行ないました。「通信小海」を月刊にしている地域に浸透しているので、そこで宣伝をすれば地域のニーズもあって中学生たちが集まりました。最初に英語で讃美歌をうたい、お祈りをして、勉強をするというやり方でした。祈るとか賛美するとかいうと、それで人は来なくなるのではないかと恐れる人がいますが、それを恐れていたら伝道にはなりません。健康のため、勉強のため祝福をお祈りしてあげればいいのです。日本同盟基督教団の法人規則には、英語教室をすることは布教活動の一つと位置づけられています。

『通信小海』：最初から22年間ずっと続けたのは、家庭集会と伝道新聞です。福音を南佐久郡に住むすべての人に届けるためです。毎月7000部作成して、新聞折り込みで配布しました。新聞というスタイルであれば字をかなり詰め込んでも日本人は読む習慣があります。また、「キリスト通信」「福音新聞」でなく『通信小海』という名称は、地域ミニコミ紙というイメージです。また、内容は一般恩恵の器に特別恩恵を包み込んで出すものとししました。前面に宗教を出すのを折り込みしてもらうことができません。そこで第一面・第二面は社会面、第三面は聖書の話、第四面は家庭面とししました。22年間で270号まで出したので、189万部配布したことになります。この地域ではほとんどの家が新聞を取っていたので、新聞折込という方法でほぼ網羅できたのです。後任の牧師はこの働きを続けてくださっていますから、現在、南佐久郡は恐らく日本でもっとも福音濃度の高い地域です。

22年間の伝道を終わって、2016年1月の『通信小海』で、私が南佐久郡を去ることを予告しました。すると、一人の愛読者が「先生がこの地域を去られるのに、何も話さないで去って行かせるわけにはいかない。」とおっしゃって、お友達と「通信小海読者の会」を作って、小海町の文化センターを借りて会場として、講演会をするようにと招いてくださいました。20名程度集まるかなあと予想していましたが、100名ほどの人たちが集まってくださいました。「人間として生きる」という題で、福音を語りました。

これらは、すべて共通恩恵の器に、特別恩恵を載せて渡すという原理に立って行いました。私たちは伝道評論家ではなく、伝道実践者として召されたのです。

第3回 教会形成

2024 年伝道懇談会

水草修治

「私は神のご計画のすべてを、余すところなくあなたがたに知らせたからです。あなたがたは自分自身と群れの全体に気を配りなさい。神がご自分の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、聖霊はあなたがたを群れの監督にお立てになったのです。

私は知っています。私が去った後、狂暴な狼があなたがたの中に入り込んで来て、容赦なく群れを荒らし回ります。また、あなたがた自身の中からも、いろいろと曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こってくるでしょう。（中略）

今私は、あなたがたを神とその恵みのみことばにゆだねます。みことばは、あなたがたを成長させ、聖なるものとされたすべての人々とともに、あなたがたに御国を受け継がせることができますのです。」使徒 20:27-32

1 氷山の話

「信者となった人々はみな一つになって、一切の物を共有し、財産や所有物を売っては、それぞれの必要に応じて、皆に分配していた。そして、毎日心を一つにして宮に集まり、家々でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美し、民全体から好意を持たれていた。主は毎日、救われる人々を加えて一つにしてくださった。」使徒 2：44 - 47

教会は氷山にたとえられます。海面上に出ている氷山の大きさは、海面下の氷の大きさにかかっています。海面上の氷山が大きくなるのは、どういうときか？海面下の部分が大きくなる時です。氷山の水面上の部分は、教会員の群。海面直下 1m は礼拝に常時出席している求道者たち、水面下 2m に家庭集会には来ているけれど、礼拝には来ていないような人たち、その下は地域に定期的に配られている福音新聞を感心をもって見ている人たち、なんとなくキリスト教に対して好意を持っているキリスト教への好意者層がある。

だから教会員、礼拝に来ている求道者、家庭集会の人々だけでなく、広く働きかけていくことが大事です。教会員が 30～50 人ほどになると、牧師はその世話だけで結構忙しくなって自己満足してしまうということが、結構あるように思います。しかし、ディダケーだけしていても神の主の命令に答えたことにはなりません。囲いの外の人々に働きかけ続けなければならないのです。広い層に関わるということは、広く福音トラクトを配布することや、広くメディア伝道することだけでなく、キリスト者たちがそれぞれ遣わされたところで社会的責任を果たして、キリスト教的感化を与えていくということです。そのためには、説教者は聖書的観点からの世界観・歴史観・「教会と国家」観、労働観、家庭観 etc...を持っていることが必要です。

「通信小海」では、基本、第一面・第二面は社会面、第四面は家庭欄、第三面は福音そのものという構成にしました。社会面、家庭欄は、南佐久郡の中に、聖書的な価値観・世界観・道徳観

がベースとして伝えられ、好意者層が広がることも大事だと考えたのです。律法の 3 用法の内の第一の律法の社会的用法です。

マタイ 5:16「このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようになるためです。」

2 ディダケー「教え」と教会形成

マタイ 28:19, 20「ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」

主に忠実に、福音を地域のすべての人に知らせるべくケーリュッソーしていると、直接それによって救われる人がなかなか起こされなくても、その人が他の困った状況にある人を紹介してくれたり、やがて神様は個人的な紹介や家庭集会や教会の礼拝に送ってくださいました。その人々には個人伝道をして、洗礼準備会をして、洗礼へと導きました。それは因習の強い田舎においては時間のかかることです。

主イエスの周りには、いつも二通りの人々がいました。一つはキリストシンパであり、一つはキリストの弟子たちです。自己実現のためにキリストを利用する人でなく、キリストのみこころが成るために自分をささげて生きる弟子を育てるのです。

教会を混乱させる問題の多くの原因は、「愛」の誤解にあるのではないだろうかと思います。肝心なことは、聖書的な正しい愛を理解し、神を愛し隣人を愛する人として育てることです。主イエスは律法の要点は、「心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」と、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」だと言われました（マルコ 12:20-31）ですから。

それで堀越暢治先生の「愛の再検討」の証しを水谷先生に紹介しました。四日市で開拓伝道をしてある程度の群になったとたんに、ゴチャゴチャと教会内の人間関係がもつれてきて、先生は心臓の具合が悪くなってしまいました。あるとき、ヨハネ福音書の最後のところを読んでいて、「愛」に関する誤解が教会を混乱させていることに気づかされました。つまり、「あの人はわたしが親切にしても『この間はありがとうございました』と言ってくれない。愛がない。」というふうなことを言って恥じることを知らない。教会で、愛ということばをよく学んで、教会における愛、クリスチャンの愛は、エロスの愛（見返りを求める愛）でなく、アガペーの愛であるということを知り、混乱は解決して行きました。『神の愛と教会の交わりー愛の再検討』（いのちのことば社）参照。

3 目ざした教会像

・・・「教会の必要最小限のしるし」でなく「必要十分なしるし」

私たちはどういう教会を目指すべきでしょうか。神学で、教会が教会であるための『教会のしるし』とは何か？と言え、正しい福音の説教と正しい聖礼典です。では、この「教会のしるし」はどういう経緯で出て来たのでしょうか？ローマ教会から分かれ出た宗教改革の教会は、改革行動は分派行動でなく、真の教会の復興のためだったことを明確にしたいと考えました。そこで真の教会のしるしを聖書に求めました。結果、改革者たちが見出したしるしとは、正しい福音の説教と聖礼典です。ここからわかるように、これらは教会が教会であるための必要最小限のしるしであって、教会にとって必要十分なしるしではありませんでした。

17 世紀ドイツの教会は「死せる正統主義」となり、18 世紀になるとフィリップ・シュペーナーたちによって敬虔主義運動が始まり、週の半ばに *collegia pietatis*（敬虔な集い）を持つようになり、聖書を開いてともに交わり、共に祈るようになると、みなが聖霊に満たされて感動して彼らは伝道を始まりました。

宗教改革と敬虔主義運動を併せたなら、使徒の働き 2 章 40 - 42 節に記されている教会の営みすべてとなります。

「ペテロは、ほかにも多くのことばをもって証しをし、『この曲がった時代から救われなさい』と言って、彼らに勧めた。彼のことばを受け入れた人々はバプテスマを受けた。その日、三千人ほどが仲間に加えられた。彼らはいつも、使徒たちの教えを守り、交わりを持ち、パンを裂き、祈りをしていた。」

伝道・洗礼・教え・交わり・パン割き・祈りという必要十分なしるしここに現われています。宗教改革の伝統に立つ正統主義の教会は敬虔主義を馬鹿にするところがあり、敬虔主義（福音派）は正統主義は死んでいると考えがちなのですが、同盟基督教団は正統主義と敬虔主義の両方をルーツとしています。

そこで、この必要十分な印を備える教会を形成することを目指したいと考えました。そこで、毎年、教会総会資料には、この教会の必要十分なしるしを整理して、諸活動の意味を整理し自覚できるようにしました。これらの営みはすべて、心を尽くして神を愛するため、隣人を自分自身のように愛するために行なわれるということを忘れないことが大事です。

4 神のことばが教会を建て上げる

（1）説教は神のことばであるという信仰

1 テサロニケ 2:13「こういうわけで、私たちもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたが、私たちから聞いた神のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実そのとおり神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いています。」

教会にとって最も影響力がある教えは、主日礼拝の説教です。まず説教者自身において、「神

のことばの説教は神のことばである」という確信が必須です。説教は単なる聖書の説明やレポートではありません。確かにエズラの時代、捕囚から帰還した民に学者たちが律法を説き明かして理解が得られたとあるように、聖書は時代・文化を隔てた古代語で書かれた文書ですから、説明が必要であることは事実で、それゆえ説教者には釈義力が必要です。しかし、説教は、人間のことばでなく、生ける神のことばです。生ける神のことばである以上、みことばが語られ、聴かれるとき、何事かが起きるのです。神のことばに傾聴して悔い改める者には、神の赦しと祝福があり、心かたくなにする者には神のさばきがあります。説教者は、神のことばを託された大使であるという自覚が大事です。

聖書は無謬の神のことばですが、誤りうる人間の説教者が語る説教がどうして神のことばでありうるのでしょうか。聖化途上のキリスト者は過ちをおかしますが、それでも聖徒であるように、聖化途上の牧師の説教は誤りを含んでいるとしても、確かに神のことばなのです。

（２）説教のプランと教理教育

①神のご計画のすべてを

使徒 20:27 「私は神のご計画のすべてを、余すところなくあなたがたに知らせたからです。」

使徒パウロはエペソの長老たちに対する訣別のあいさつにおいて、相手がユダヤ人であろうと異邦人であろうと「神に対する悔い改めと、主イエスに対する信仰」を宣べ伝えたと言いました。それが滅びゆく人を救うためのケーリュグマであるからです。しかし、そのすぐ後に彼は「神のご計画のすべてを余すところなく、あなたがたに知らせた」と断言します。開拓伝道だからといって、入口である福音のみを話してはだめです。そのあと成長し、神の栄光を現わし、神の民として責任ある生き方をしていくための、ディダケー（教え）が必要です。

②説教：福音書連続講解と信条講解

基本は朝夕、福音書の連続講解説教をしました。福音書、創世記、パウロ書簡、出エジプト記、公同書簡・・・と。

その連続講解の谷間・谷間には、使徒信条の順に教理の講解、また、同盟基督教団信仰告白の講解説教もしました。

さまざまな箇所から説教をするとしても、肝心なことは神を知り、神を畏れ、神を愛し、神が賜った隣人を愛することが目指していることです。

③教理教育

「私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。」（使徒 20:27 新改訳第二版、第三版）と言いました。説教者は、信徒に対して、神のご計画の一部分でなく、神のご計画の全体を伝えなければなりません。

聖書全体を理解するにはカテキズム教育が有効。洗礼準備は教団の信仰告白文と教会生活の要点を学ぶ。ほかに、信仰告白文講解説教、『神を愛するための教理問答』、役員会ではウ告白

(3) 特に心に止めてきた教理

①創造論・・・・・・・・・・神の主権、世界観、人生観のための土台。

②キリストの代償的贖罪・・・道德感化説・主観説は現代においても問題。中世のアベラール、近世のソツィーニ、近代のシュライエルマッハー、今日でも、著名な新約聖書学者たちは、キリストの代償的贖罪を否定している。彼らは、神の怒り、神の審判を毛嫌いする。

③救済論の3教理の関係・・・義認・聖化・子とすること

- ・義認の教理の重要性・・・・・・・・・・救いの確信のために必須
- ・義認と聖化の教理の課題・・・・・・・・・・個人的で教会との関連付けが難しい。

義認と聖化の矛盾→律法主義と無律法主義

- ・「子とすること」の教理の重要性・・・律法主義と無律法主義からの解放

個人主義から教會的信仰理解へ

④教会と「救い」の関係

福音書に見るように、主イエスは一人一人との出会いの中で福音を語られました。個人伝道は必須です。しかし敬虔主義には、個人の回心を追求して、教会を見失ってしまったという弱点があります。主イエスは、キリストに従うために父母、兄弟を捨てた者に、主イエスは、この世ではその百倍を受けると約束されました。つまり神の家族を得るのだと約束されたのです。キリスト教信仰は教會的信仰です。キリストを信じて救われることは、神の前にキリストにあって義と認められただけでなく、神の子とされて神の家族の一員にされたことを意味します。目に見える主にある兄弟姉妹を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。「救い」の理解として、「義と認められ、罪赦され、新生した」という側面と共に、「神の子として生まれ、神の家族の一員とされた」という側面があることを、十二分に牧師が理解し納得し、救われる人に十分に教えることが必要です。

そもそも、「神は、みこころの良しとするとおられるにしがって、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました。」(エペソ 1:5) とあるように、神のご計画のゴールは、義認ではなく、子とすること、神の家族の一員とすることなのです。救いを、キリストにあって救われた者がこの世で受ける祝福を<義とされたこと、聖とされていくこと>の2点で捕えるのは不十分です。<義とされたこと、子とされたこと、聖とされていくこと>の三つの面から捕えることが重要です。義認と聖化は個人主義的に取られるこ

とがありがちですが、子とされることは神の民に加えられることです。（詳細は水草著『新・神を愛することの神学講座』15, 16, 17 章）

⑤「教会と国家」

「教会と国家」というテーマは、地上で最初の権力者ニムロデの出現以来の教会史のテーマです。神のしもべとしての国家の顔（ローマ 13:1-7）と、悪魔の手先としての国家の顔（黙示 13 章）、立憲主義の原理（申命記 17:14-20）、ヤロブアム 1 世の国家宗教創設（1 列王記 12:25-33）、ネブカデネザル王による金の像崇拜（ダニエル書 3 章）、為政者のために祈ること（1 テモテ 2:1-3）などで、明治維新以降現代にいたる「教会と国家」の課題を照らし出してきました。

参照＞結城晋次『日本伝道 170 年「歴史の過去と将来—日本キリスト教史の見直し—」』

水草修治『聖書から見た「教会と国家」』（HP「水草牧師の書き物」からダウンロード可）

⑥要注意の異説

使徒 20:29-30「私は知っています。私が去った後、狂暴な狼があなたがたの中に入り込んで来て、容赦なく群れを荒らし回ります。また、あなたがた自身の中からも、いろいろと曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こってくるでしょう。」

- ・自由主義神学（人間中心主義）

理性主義・人間中心観・無限抱擁的神観・模範者キリスト観・主観的贖罪論

- ・N.T.ライトの義認論は、その背後にリベラル・合理主義的方法論がある。

- ・中川健一の「世界情勢あてはめ」終末論

5 牧師と妻

（1）キリスト者夫婦は、キリストと教会の結婚の予型

妻は TCC で、神学校時代 1 年間重なっていましたが、卒業後、主の導きがあって、1986 年 11 月 3 日に結婚しました。その春から大学院でアウグスティヌス研究を始めており、教会の働きと勉強で一週間に二日は半徹夜という生活だった。仕事と勉強ばかりして、半年たったとき、妻が泣いた。「なんのために結婚したのかわからなくなった」と。その時、1 ペテロ 3:7「同じように、夫たちよ。妻が女性であって、自分よりも弱い器だということをわきまえて妻とともに生活し、いのちの恵みをとともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです。」を学んだ。妻を大切にしない男の祈りに、父なる神は答えてくださらない。祈れない牧師では役に立たない。それから、自らを戒めつつ、少しずつ変えられて来た。

夫婦の関係・役割分担は、キリストと教会の関係の型であるとエペソ 5:22-33 は教えている。

「教会がキリストに従うように、妻もすべてにおいて夫に従いなさい。夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を献げられたように、あなたがたも妻を愛しなさい。」

牧師夫婦は、その生き方をもってキリストと教会の交わりを信徒にあかししているのです。

（２）お互いの理解を深めるのに役立ったこと・・・幼少期の感情体験を話す

お互いを理解することが、愛を深めるための条件です。ではどのようにお互いに理解できるでしょう。参考になる本は、石井希尚『この人と結婚していいの？』（新潮文庫）。

お勧めしたい実践は、毎日いっしょに散歩をしながら、幼少期・青年期の感情体験をわかちあうことです。二人が出会うまでには、配偶者には二十数年間の人生があります。少女の時代の妻、少年時代の夫が、笑ったり、べそをかいたり、怒ったり、恥ずかしがったりしていることがイメージできるようになると、無理なく相手がいとおい存在になってきます。

6 信徒会から役員会の形成へ

（１）役員会形成のタイミング

群が小さい時、未熟な時には、役員会を無理につくる必要はありません。かえって一部の人に疎外感を与え、風通しが悪くなるだけです。群が小さい時には、制度的には牧師一人が役員ということですが、願いとしてはむしろ全員が役員という自覚をもってほしいと考えます。そのため、会計報告は毎月出し、信徒会は原則として毎月行い、教会総会は毎年一度行いました。教会としての方向を確認し合うことは、教会形成をする上で必須のことです。

小海キリスト教会の場合には、教会規則を定めて役員会を形成したのは、2008年春の総会です。開拓から14年目のことです。

（２）役員の選び方

「なんとなく選挙」をしてはなりません。なんとなく選挙すると、この世的価値観で選んでしまうからです。毎回、聖書における役員の資格を確認してから、選挙をしました。

御心にかなった教会役員の選び方

初代キリスト教会で最初の信徒役員が選出された記事が使徒の働き 6章 1-6節に記されています。ここで使徒たちは「**御霊と知恵とに満たされた評判のよい人**」（3節）を選ぶようにと言いました。これから、役員の資格は三つの面から説明できます。

第一に、「御霊に満ちている」とは、クリスチャンとしての品性です。御霊に満たされた生活をしている人は、御霊の実、「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」（ガラテヤ 5：22,23）を結ぶことができます。役員を選ぶには、まず御霊の実を備えた人は誰ですか？と祈りつつ考えましょう。

第二に、「知恵に満ちている」とは、御霊の賜物（1 コリント 12：4）つまり、教会役員として奉仕するために必要な知恵です。役員をするための必要な知恵とは、牧師を補佐し、教会を治め、人々との間に立ってよい関係を作る知恵のことです。そうした知恵のある人はだれかと祈り考えましょう。

第三に、「評判がよい」ということです。教会内だけでなく教会外の人々にも評判がよいことです（1 テモテ 3：7）。教会内で評判がよくなければ、会員の支持を受けられませんか、支持を受けられなければ誰をも指導できません。また役員は対外的にも評判がよいことも必要です。

他にテトス 1：5-9 もご覧ください。「監督」と呼ばれるのは、「長老」と同じことです。

（3）役員の方

役員会を実務だけで終わらせない。役員会の最初に、『ウェストミンスター信仰告白』を順々に学びました。役員たちを牧師のイエスマンにするのではなく、聖書的・教會的にものを考えて判断し、牧師にも助言できるように育てることが大事です。

結びに 牧会者の最優先の祈りの課題

「そこで、私は何よりもまず勧めます。すべての人のために、王たちと高い地位にあるすべての人のために願い、祈り、とりなし、感謝をささげなさい。それは、私たちがいつも敬虔で品位を保ち、平安で落ち着いた生活を送るためです。」（1 テモテ 2:1-2）

牧会者テモテに対して、牧会の要諦を述べるに当たって、パウロがまず初めに勧めたことは「すべての人のため、王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝を捧げる」ことです。国家が暴走をしたなら、戦前・戦中の教会がそうであったように、「敬虔で品位を保ち、平安で落ち着いた生活を送る」ことができなくなります。だから、牧会者として、まずこの祈りを捧げることが大事です。

明確な神学的確信に基づく地方伝道の実践とその結実

〈評者〉牧田吉和

書評 水草修治著『私は山に向かって目を上げる』

—信州南佐久における宣教と教会開拓—

本書は他に類を見ないユニークな書である。確かに、本書は副題にあるように、著者の信州南佐久における22年間にわたる開拓伝道の苦闘と恵みの記録が中心的に記されている。しかし、単なる開拓伝道の記録ではない。本書には、著者自身の回心の証、伝道者への召し、神学校での学び、伝道者・牧師としての生き方、日本宣教を見据えた伝道論と開拓伝道の実際、それらの道程の中で一貫して模索された神学的思考と神学思想が一体化して記されている。300ページ弱の小著ではあるが、充実の書である。

本書は求道者の方々にも読んで欲しい。冒頭の「回心」の項で、自らの求道生活について、本来伏せておきたい家庭内の悲劇的出来事さえ正直に記し、自らの求道と回心の道を書きつづっている。求道者の方々にとっては信仰の決断への勇気を与えられるのではないだろうか。信仰者にとっても、本書を通して信仰に生きるとはどういうことかを具体的に教えられるはずである。

本書は、何よりも伝道者が読むべき書である。著者は地方伝道に徹底して取り組んでいる。いわば日本伝道の根っこを見据えた伝道である。著者は神学校時代の祈祷グループ「日本福音土着化祈祷会『葦原』」について記している(59頁以下)。この『葦原』の趣意書は特に「『農村』と称される地域への宣教のために祈りと学びを行う」ことを目的として掲げている。「『都市』中心の宣教論のみ横行する現状に対する小さなアンチテーゼ」とも記している。この志と信仰的信念に従い、著者は信州南佐久郡の小海町(当時の人口7千人)において開拓伝道を開始するのである。その伝道は困難を極める。同じように高知の西南端の地にいる評者には日本宣教を見据えた地方伝道への志も、伝道の苦労も手にとるように理解することができる。この地方伝道の働きにおいても、単なる福音宣教の情熱にとどまらず、明確な神学的確信に基づいて取り組む。「『福音を文脈化する』のは間違いであり、文脈化すべきは福音を伝える媒体である」という確信である(135頁)。この確信に従って、著者は「共通恩恵の器に特別恩恵である福音を載せて差し出す」ことを主張する(139頁)。この具体的実践は本書で豊富に披歴されている。伝道者にはぜひとも読んでいただきたい叙述である。中でも注目したいのは22年間継続して刊行された月刊「通信小海」とその新聞折込の働きである。人口2万5千人の南佐久郡で毎月7千部を、実に270号まで刊行され続けたのである。聖書的観点からの時事問題、聖書の話、家庭問題などが扱われた。著者がその地を去る前に「『通信小海』読者の会」が開催され、実に百名を超える人たちが集まったというのである(231頁)。

本書は神学学徒も読むべき書である。著者は開拓伝道に伴い、神学教師の道を断念する。しかし、神学的探求を断念したわけではない。むしろ、信仰の歩みの中で、伝道と教会形成の只中で神学しつつ、その中で神学的真理を確証して行く。著者は、本書において、自著『新・神を愛するための神学講座』(地引網出版。同書の索引も本書巻末に付録として掲載)の該当箇所を指示している。神学が信仰の歩み、伝道と教会形成にしっかりと根づいている。この意味で、本書は「神学とは何か」をも教えてくれる書である。本書は実にユニークな書である。お世辞抜きで読んで欲しい書である。(日本キリスト改革派宿毛伝道所牧師 牧田吉和 本のひろば 書評2023年11月掲載)